

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：11601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00920

研究課題名(和文) 大衆娯楽と他者認識 - 江戸から明治へ

研究課題名(英文) Perceptions of others in mass entertainment - from Edo to Meiji

研究代表者

伊藤 俊介 (Ito, Shunsuke)

福島大学・経済経営学類・教授

研究者番号：10737878

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、「唐人踊り」「唐人祭り」にみる朝鮮認識、「戦争芝居に描かれた中国朝鮮像」、「浪花節に語られたナショナリズム」という3つのテーマを設定し、大衆娯楽に描かれた他者像の分析をもとに民衆の他者認識の形成と変容について検討した。テーマ1はコロナ禍の影響で十分な調査が実施できなかったため今後の課題としたい。テーマ2は日清戦争芝居の脚本に登場する中国人・朝鮮人の描写を通して新派劇俳優川上音二郎の他者認識を検討し、論文を発表した。テーマ3は中国革命の支援活動で挫折し浪花節語りとなった宮崎滔天が自らの主張をどのように浪花節に結実させたかを検討し、研究協力者により論文が発表された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで日本人の他者認識をめぐっては主に学者や政治家といった知識人の立場から語られた言説を検討したものがほとんどであったが、本研究ではそうした知識人層ではなく、広く一般の日本人における他者認識がどのように形成され、また変容していくのかという問題に焦点を当て、大衆娯楽という媒体を通してそれらを長期的スパンで捉えようと試みた。こうした試みは、グローバル化や文化の多様性が声高に唱えられながらも、いまだに排外主義的な主張が繰り返されている現代の日本が抱える問題の淵源を考えるうえでも、極めて重要な作業である。

研究成果の概要(英文)：This study examines the formation and transformation of people's perception of others based on the analysis of images of others depicted in popular entertainment under three themes: (1) "Recognition of Korea in 'Tojin Odori' and 'Tojin Matsuri'" (2) "Images of China and Korea depicted in war plays" and (3) "Nationalism depicted in Naniwa-bushi". Theme (1) was not fully investigated due to the impact of the coronavirus pandemic. This Theme will be discussed in the future. Theme (2) examined Otojirō Kawakami's perception of others through the portrayal of Chinese and Koreans in the scripts of Sino-Japanese War plays. The results were published in a paper. Theme (3) examined how Toten Miyazaki, who became a Naniwa-bushi storyteller after being frustrated by his support activities for the Chinese Revolution, brought his own ideas to fruition. The results were published by a research collaborator.

研究分野：朝鮮近代史

キーワード：日本史 東アジア史 大衆娯楽 他者認識 唐人祭り 新派劇 浪花節 唐人踊り

1. 研究開始当初の背景

近代(明治期)における日本人の他者認識をめぐる研究は、古谷哲夫編『近代日本のアジア認識』(緑陰書房、1996年)吉野誠『明治維新と征韓論 - 吉田松陰から西郷隆盛へ』(明石書店、2002年)宮地正人『日本的国民国家の確立と日清戦争』(比較史・比較歴史教育研究会編『黒船と日清戦争 - 歴史認識をめぐる対話』未来社、1996年)など、これまで政府の対外政策のあり方や知識人層のアジア論などを主たる分析対象として行われてきたが、日本の一般民衆に他者認識がどのように形成され浸透したかという問題は十分な研究がされてこなかった。

近年、兵藤裕己『演じられた近代 - “国民”の身体とパフォーマンス』(岩波書店、2005年)金山泰志『明治期日本における民衆の中国観 - 教科書・雑誌・地方新聞・講談・演劇に注目して』(芙蓉書房出版、2014年)など、大衆娯楽に描かれた他者像の分析を通して日本の一般民衆の他者認識を検討する試みが行われているが、対象期間の短さ、娯楽作品の具体的な形成過程や一般民衆による下からの契機の欠如といった問題が挙げられる。

2. 研究の目的

本研究は大衆娯楽という切り口から日本人の他者認識の形成と変容の推移について検討することを目的とする。その際、(1)他者認識がどのように形成され変容するか(江戸から明治への連続と断絶)(2)他者像の描写をめぐりどのような対立や葛藤があるか(大衆娯楽の制作過程における関係者間の相関関係)(3)「下から」の動的な契機の可能性はあるか(一般民衆の他者像の受容と忌避)という3つに重点を置き、大衆娯楽に描かれた他者像とその受容のあり方について多角的な視点から重層的に捉えることで、日本人の他者認識の本質的性向へのアプローチを試みる。これは、グローバル化や文化の多様性が唱えられながらも、いまだに排外主義的な主張が繰り返される現代の日本が抱える問題の本質を考える上でも、極めて重要な作業である。

3. 研究の方法

本研究は以下の3つのテーマのもとに進めた。

テーマ : 「唐人踊り」「唐人祭り」にみる朝鮮認識

日本全国の「唐人踊り」「唐人祭り」に関する現地調査を行い、近世から現在まで続く祭りの変遷を分析し、変化した要素を抽出して各時代の中に位置づけ、これらに表象される民衆の他者(朝鮮)認識の様相を考察する。

テーマ : 戦争芝居に描かれた中国・朝鮮像

新派劇俳優の川上音二郎が日清戦争時に興行した戦争芝居の分析をもとに芝居に描かれた中国・朝鮮像を明らかにするとともに、興行に見られる検閲や観客の嗜好の影響の有無、さらには川上自身の戦争観や他者認識について検討する。

テーマ : 浪花節に語られたナショナリズム

革命運動家から浪花節語りへと転身した宮崎滔天に焦点を当て、彼が自らの主義主張をどのように浪花節に結実させたかを検討するとともに、彼の浪花節に対する聴衆の反応をもとに当時の民衆像も明らかにする。

4. 研究成果

テーマ : 「唐人踊り」「唐人祭り」にみる朝鮮認識

岡山県・三重県における大衆芸能「唐人踊り」「唐人祭り」の形成と各地の領主との関係を検討した研究分担者の既発表研究(須田努「通信使外交の虚実」趙景達編『近代日朝関係史』有志舎、2012年)を前提に、全国各地に残る「唐人祭り」「唐人踊り」の実地調査をもとに、近世から現在まで続く祭りの変遷を分析し、変化した要素を抽出し、それを時代の中に位置づけ、そこに表象される他者(朝鮮)認識の様相を考察する予定であった。しかし2019年度末より発生した新型コロナウイルスの感染拡大の影響で各地の伝統行事が中止される事態となり、研究を遂行するための十分な調査が実施できなくなってしまった。同テーマについては引き続き今後の課題として各地の行事の再開状況などを鑑みつつ検討することにしたい。

テーマ : 戦争芝居に描かれた中国・朝鮮像

川上音二郎一座が1894年12月に東京浅草で興行した日清戦争芝居『川上音二郎戦地見聞日記』の脚本を分析し、芝居に描かれた中国人・朝鮮人の描写をもとに川上の戦争観と他者認識を検討した。芝居の脚本と当時新聞に掲載された劇評等の記事との比較の結果、同芝居には興行の過程で演出が変更された箇所が少なからずあった。これらは何れも日本軍人の活躍描写と中国人・朝鮮人の描写に集中しており、警察当局による検閲結果の反映に加え、興行の過程で観客の嗜好を取り入れた結果と見られる。ただ、これらはいくまで興行主としての川上の判断であった。演出に変更が加えられる前の脚本には日本の侵略意図やステレオタイプ化された中国・朝鮮像とは異なる台詞も散見され、川上自身は日清戦争の本質を見抜いており、また中国や朝鮮にも高揚するナショナリズムの中で広がるステレオタイプ化された蔑視観とは違った眼差しを

持っていたものとする。この研究成果は論文として発表した。

テーマ：浪花節に語られたナショナリズム

中国革命の支援活動で挫折を味わった後、民衆への同化を志向して浪花節語りに転身した宮崎滔天に焦点を当て、彼が主義鼓吹の具として自作した浪花節の原稿や新聞記事、速記本などの分析を通してそれらの特徴を明らかにし、彼が自らの主義主張をどのように浪花節に結実させたかについて、彼の革命支援運動と浪花節語りとしての活動遍歴を追いつつ検討した。その上で、そうした宮崎滔天の民衆認識やアジア認識を通じて近代化の過程で変容する民衆の「共同性」（職住の環境で居合わせる他者と思いを通わせる基盤となる関係性）の様相について考察した。この研究成果は研究協力者によって論文が発表された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 伊藤俊介	4. 巻 25
2. 論文標題 芝居に描かれた真土村事件 - 『噂廻松蚊鎗夜話』をもとに	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア民衆史研究	6. 最初と最後の頁 51-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須田努	4. 巻 84
2. 論文標題 排外的ナショナリズムの形成と社会的影響 富国強兵・尊王攘夷	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 明治大学人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 48-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木然	4. 巻 825
2. 論文標題 書評 須田努著『三遊亭円朝と民衆世界』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 93-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木然	4. 巻 24
2. 論文標題 原正忠「韓行日記」からみる壬午軍乱と朝鮮観	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア民衆史研究	6. 最初と最後の頁 60-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木然	4. 巻 150
2. 論文標題 民衆の朝鮮認識を探る史料としての錦絵：壬午軍乱時の小林清親作品を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京経済大学人文自然科学論集	6. 最初と最後の頁 25-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Juljan Biontino	4. 巻 32-1
2. 論文標題 Changes in funerary rites and burial practices in Modern Korea (1876-1945)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Contemporary Japan	6. 最初と最後の頁 6-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/18692729.2020.1717131	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Juljan Biontino	4. 巻 Spring
2. 論文標題 Tabooization of Korean funerary culture under Japanese rule - The Case of Yun Ch'i-ho (1865-1945)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Silva Japonicarum	6. 最初と最後の頁 15-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.12775/sijp.2019.60-61.2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Juljan Biontino	4. 巻 April
2. 論文標題 Utsunomiya Tokuma und die zwei Koreas - Hinwendung zum Norden zur Rettung des Sudens?	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 OAG Notizen	6. 最初と最後の頁 47-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Juljan Biontino	4. 巻 127
2. 論文標題 Utsunomiya Tokuma (MP, 1906-2000) and the Abduction Case of Kim Tae-jung (1973) : Pushing Toward Policy Change in Japanese-Korean Relations	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Korean Journal of Japanology	6. 最初と最後の頁 67-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15532/kaja.2021.05.127.67	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 伊藤俊介
2. 発表標題 芝居に描かれた真土村事件 - 『噂廻松蚊鎗夜話』の分析をもとに
3. 学会等名 アジア民衆史研究会2019年度第2回大会「メディアからみる国家と民衆の暴力」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊藤俊介
2. 発表標題 兪吉濤的開化思想
3. 学会等名 広東海洋大学寸金学院『第二屆 北部湾区域戰略發展檢討会』（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 須田努
2. 発表標題 文明開化に生きる三遊亭圓朝
3. 学会等名 鎌倉市鍋木清方記念美術館 美術講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 須田努
2. 発表標題 三遊亭円朝ゆかりの地を巡る
3. 学会等名 東京都中央区（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 青木然
2. 発表標題 民衆の朝鮮認識を探る史料としての錦絵 壬午軍乱時の小林清親作品を中心に
3. 学会等名 東京経済大学学術フォーラム「東アジア近代史視覚資料の再発見」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 青木然
2. 発表標題 原正忠「韓行日記」からみる壬午軍乱と朝鮮観
3. 学会等名 アジア民衆史研究会2018年度第2回研究会「工兵と新聞記者がみた19世紀朝鮮」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Juljan Biontino
2. 発表標題 Cheonhu Han-il kwangae wa Utsunomiya Tokuma (Postwar Japanese-Korean relations and Utsunomiya Tokuma)
3. 学会等名 Conference of the Korean Association of Japanology (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Juljan Biontino
2. 発表標題 Der Berg Namsan in Seoul als Schauplatz der japanischen Assimilationspolitik (1890-1945)
3. 学会等名 Initiative der historischen Japanforschung (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Juljan Biontino
2. 発表標題 The Spanish Flu in Germany 1918
3. 学会等名 13th Kyujanggak International Symposium, Panel: Natural catastrophes and epidemics/pandemics in history
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Juljan Biontino
2. 発表標題 宇都宮徳馬 (1906-2000)の朝鮮観と韓国・北朝鮮における影響 「自民党の一匹狼」
3. 学会等名 同時代史学会主催日韓シンポジウム「1945 年以後の北東アジア史をどうみるか 冷戦後を見据えて」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Juljan Biontino
2. 発表標題 Europe as perceived by Utsunomiya Tokuma (1906-2000): Implications for East Asia in times of the Cold War
3. 学会等名 Entangled Transformations of East Asian and European Nation States in a Global History Perspective, Association of Asian World Historians, Osaka University (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Juljan Biontino
2. 発表標題 Shinto and Assimilation Policy in Colonial Korea as seen on Namsan Mountain in Seoul, 1892-1945
3. 学会等名 EAJS in Japan Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Juljan Biontino
2. 発表標題 Yanaihara Tadao-The Korean case in Japan's Colonial Studies
3. 学会等名 International Conference: Global Transfer of Knowledge and the Change of Local Society. Western Knowledge and East Asia, Kyungpook National University
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Juljan Biontino
2. 発表標題 Utsunomiya Tokuma (1906-2000) 's Perception of the Koreas (1965-1975)
3. 学会等名 22nd Asian Studies Conference
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 伊藤 俊介、小川原 宏幸、慎 蒼宇、久留島哲、趙景達、村田遼平、藤田貴士、大川啓、長澤淑夫、中村祐也、韓梨恵、内津マリノ、田中正敬、山口隆行、青木然、野村美和、雨宮史樹	4. 発行年 2022年
2. 出版社 有志舎	5. 総ページ数 430
3. 書名 「下から」歴史像を再考する	

1. 著者名 佐野孝治、三浦浩喜、McMichael, William D.Y.、McCasland, Philip Leroy、沼田大輔、Gunske von Kolln, Martina、吉川宏人、Kuznetsova, Marina、伊藤俊介、朱永浩	4. 発行年 2022年
2. 出版社 八潮社	5. 総ページ数 306
3. 書名 東日本大震災からの復興に向けたグローバル人材育成	

1. 著者名 須田 努	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 278
3. 書名 幕末社会	

1. 著者名 北條勝貴、岡本雅享、是澤櫻子、加藤圭木、佐藤壮広、川端浩平、工藤健一、杉浦鈴、須田努、西村明、内田力、門屋温、アンダソヴァ・マラル、土居浩、黒田智、師茂樹、池田敏宏、水口幹記	4. 発行年 2020年
2. 出版社 森話社	5. 総ページ数 336
3. 書名 療法としての歴史 知	

1. 著者名 荒木 浩、前川志織、木場貴俊、金水 敏、芦津かおり、井上章一、永井久美子、佐々木高弘、佐野明子、青木 然、山口記弘、深谷 大、近藤和都、江口久美、松井広志、マイケル・エメリック、久留島	4. 発行年 2021年
2. 出版社 K A D O K A W A	5. 総ページ数 376
3. 書名 キャラクター の大衆文化 伝承・芸能・世界	

1. 著者名 Ioannis Gaitanidis、見城悌治、Juljan Biontino、小林聡子、佐々木綾子、デールSPF、吉野文、西住奏子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 240
3. 書名 クリティカル日本学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	須田 努 (Suda Tsutomu) (70468841)	明治大学・情報コミュニケーション学部・専任教授 (32682)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	青木 然 (Aoki Zen)		
研究協力者	ピオンティーノ ユリアン (Biontino Juljan)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------